

ヘルマンコーエンに就て

中川 得立

コーエンが死んだといふことであるが氏の爲人や生活について多くを知らぬ私は茲に精しく氏の傳を記すことが出来ない。一八四二年コスウィヒ

に生れ同七三年マールブルヒ大學の教授となり爾後一九一二年に至る殆ど四十年の長きに亘り同大學に哲學を講じた。新カント學派の第一人者として現代の哲學に重きをなした氏の學績については私が述べるまでもなく周知の事柄であらう。氏の學說でも詳しく紹介すればよいのであるがそれもコーエンを知れる人にとつてはあまりに知られすぎた憂があり氏を知らぬ人に對しては餘りに言ひ足らぬ憾があらう。茲にはたゞ氏の訃を記念する爲に短き感想の如きものを誌して置きたいと思

ふ。

コーエンは猶太人種である。氏の事業はカントの研究に始つて眞に先驗的方法の何たるかを明かにしカントの立場にたつて氏の哲學を構成することにあつたが氏の人格の根柢には深きユダヤの思想があつた。ユダヤの宗教は神の唯一存在である。神の外に存在はない。世界は神の中にあつて我は神によつて存在する。

コーエンの學問は無論カントの哲學に終始してゐるが氏の深き性格を動かしたものはユダヤの唯一神教的思想であつたと思ふ。併しカントの哲學は飽くまでも嚴密なる理性の批判である。コーエ

ンはカントを解釋するにプラトンに依らうとした。プラトンのイデーは即ちユダヤのロゴスである。コーエンは近著 *Deutschtum und Judentum* といふ小冊子の中に猶太思想と獨逸精神との關係を論じて此の如き異りたる兩思想を結びつけるためには此等の兩思想と内面的關係を有する第三の思想がなければならぬ、而して此第三思想は希臘精神であると論じてゐる。神は自ら直ちに人及び世界を支配するのではない、神は人を支配するために自己と人との間に仲介者を置く。仲介者とは即ちロゴスである。ロゴスは神の靈である、新しき聖なる靈である。アレキサンドリアの猶太人フィロ (Philo) はロゴスの思想を唱へだした點に於いて彼はもはや猶太人ではない、プラトンの弟子である。コーエンも又プラトンの弟子としてカントを解釋せんとした。カントの理性批判よりすれば形而上學的唯一實在の如きは固より成立しない

筈である。併しコーエンの人格には深き形而上學的的要求が動いてゐた。無論此の如く解釋するのはコーエン自身も嫌ふことであり此派の人々の一般に反對する所であらう。ナトルブも「カントとマールブルヒ學派」の中にマールブルヒ學派がヘーゲルの形而上學と同一視せられんことを恐れて兩者の區別を論ずることに力を極めてゐる。「純粹知識の論理に於て論ずる所はメトードとしての哲學であつて形而上學ではない、ヘーゲルの如き絶對論ではなくして理性の批判である。どこまでもカントの立場に止まらうとするコーエンとしては固よりさもあるべきことであらうが併し此派の人々のいふメトードとは決して單なる方法論を意味するのではない、方法とは事物を無限の發展に於て見ることである。Faktumを'Ereignis'として見ることである。實在を過程として見ることである、事實を運動として見ることである。然らば何

が無限に發展するのであるか。實在は過程であり運動であると云ふが、實在そのものは果して何であるか。コーエンによればかく實在を創造し發展するものは理性である、ロゴスである、Ratioであり、法則である。コーエンは思惟の無限なる發展に凡ての實在を見ようとした。カントにあつては思惟に相對して外より與へられると考へられた經驗は、コーエンによつて盡くロゴスの發展の中に溶解せらるゝこととなつた。與へられるといふのは問題として與へられることである、經驗は思惟に無關係のものではない、思惟によつて要求せられたものである。思惟によつて要求せらるゝといふのは思惟の統一の中に其根源を見出すことである。即ち根源ウツスプレンの原理(Princip des Ursprungs)によつて思惟の統一に歸入(Rückführung)することである。思惟は無限の發展である。思惟するといふのは無規定を規定することである。所與の

經驗は思惟の衝突して靜止すべき障壁ではない。思惟の規定が即ち思惟の發展であり思惟の發展はやがて思惟内容たる經驗の創造である。即ち實有は思惟である。ロゴスの外に存在はない。經驗は非有である。非有は無に非ずして有に課せられたる問題である。有によつて解かるべき課題である。凡てが思惟であり思惟が凡てとなければならぬ。ナトルプは此思想をヘーゲルの *Was Wirklich ist das ist Vernünftige* と區別すべきことを論じてヘーゲルの汎論理主義に對してコーエンの立場を汎方法主義とでも名くべきを主張してゐるがコーエンにとつても實有は即ちロゴスである。ロゴスの外に實有はない。無論コーエンの實有は獨斷的實在ではないが、プラトンのイデーと同じ意味に於ての存在である。プラトンのイデーが如何なる實有であるかは一の問題であり又ナトルプの解釋した。イデー(Natorp: Platon's Ideenlehre)が

果してプラトンの眞意であるか否かもが一の問題

であらうが、とにかく此派の思想の根抵には一の實有があると思なければならぬ。コーエンの哲學は單なる方法論ではなかつた。氏は認識論に満足するには餘りに實有に對して強き執着を有つてゐた。ナトルプの云ふやうに氏をヘーゲルから區別するものは *das Ziel* に非ずして *der Weg* であり此派の人にとつては後者が凡てとあるとも云へるであらうがロゴスが如何なる道をとつて發展するにせよロゴスが即ち唯一の實有であることは争はれないと思ふ。ナトルプはヘーゲルのディヤレクタクを以て其自身に完結した圓形的完體であるとして此點からコーエンが無限の過程として考へた此派の認識論を區別しようとしてゐるが意識の運動はコーエンに従つても單に無限なる直線的運動ではあるまい。所謂連續原理によつて其の元に還つて進み行く圓形的運動であると考へねば

ならぬ。

コーエンは彼の人格の根抵にひそむ猶太的思想をプラトンによつてカントに適用せんとした。彼がプラトンの學徒たる限り彼はもはや猶太人ではないであらう。況やカントの忠實なる（眞の意味に於ての）學徒たる以上はユダヤの宗教思想とは相距ることが遠い。併し彼の血管にはユダヤの血が流れてゐた。彼の心臓にはダヴィドの脈搏がうつてゐた。彼はひそかに「神よ！汝の與へ給ひし靈の清かれ。汝は靈を創造して我に與へ給へり。我に與へ給ひし神の靈の清かれ」と祈らなかつたか。

ユダヤの宗教は第一に神の唯一存在である。第二に靈の淨潔 (*Die Reinheit der Seele*) である。コーエンは最も純粹なる思惟によつて我々の知識を論ぜんとした。思惟の純粹性とは思惟が自己の内容を産出することである。純粹とは無内容といふ

ことではなし。denk fremde なる所與を混せざる
 ことである。思惟が其れ自ら其自らの爲にのみ發
 展することである。コーエンは此の思惟の愈々純
 粹ならんことをのみ祈つた。思惟は其自ら無限の
 發展である。意識は單なる状態ではない、不斷進行
 の運動である。知識は單なる觀照ではない、自發
 自展の運動である。即ち純粹思惟は單なる思惟で
 なくして一の働きである。純粹意志の働きであ
 る。思惟は意志動作である。コーエンは此意志を
 以て彼の倫理學を構成せんとした。此の意志によ
 つてカントの倫理學を解釋せんとした。カントの
 倫理學は自律性と法則とを以て二の樞軸とする。
 前者は自由の概念であり後者は義務の概念であ
 る。義務とは神の命令である。カントは之を無上
 命令とした。義務に従ふとは自己の人格性に従ふ
 ことである。價值法則に従ふことである。神の命
 に奉仕することである。法則に従ひ神に奉ずるの

は法則に屈し神に服することではなし。却て眞に
 我々の自由を得る所以である。自律とは法則に従
 ひ神に奉ずることの別名に外ならない。自由と義
 務とは一にして二でない。純粹意志は無限の發展
 である。

自由を得るといふのはこの意志の流に棹すこと
 である。義務に従ふとは此意志の發展に則ること
 である。純粹意志は法則其ものゝ發展である。純粹
 意志の内容は當爲其自らである。當爲は外から與
 へられたものではなく、純粹意志の自發自展であ
 る。意志は自己の中より内容を創造して進む。純
 粹意志を動かすものは欲望ではない純粹意志其自
 らである。感覺が直に知識でない様に欲望は直ち
 に意志でない。欲望が直に意志でない様に快苦は
 直に純粹感情ではない。

快不快は普通に感情を他の意識作用より區別す
 る標徴と考へられるのであるが快不快は單に主觀

的なる意識状態にすぎない。未だそれは何等の獨立なる客觀的意識内容を與へることができぬ。不快は意識の *Content* となり得るかも知らぬが *Inhalte* となることはできなす。

純粹感情は其自ら内容を創造する無限の發展である。カントの美學に於て無關心といふとが少くとも一の重要なる問運をなしてゐるが無關心とは純粹感情の直接なる状態を言ひ表したものに外ならぬ。純粹感情を動かすものは外から與へられたものではない、欲望でもなければ快不快でもない、純粹感情それ自身である。純粹とは其自ら自己の内容を生産するとである。其自らの發展に何等の異分子をも混ぜざることである。藝術は外から與へられたる印象を模寫する所に成立するのではない。藝術は自然の模倣ではない美的價値の當爲に従ふ所に藝術の創造が生れるのである。純粹感情は即ち美的價値の發展である。美的判斷の客

觀性もかくして立せられるのである。

然らば純粹感情は如何なる意識であるか。感情を他の意識と區別するものは何であるか。意識は其自らに於て動的なる無限の發展である。感情とはかくの如き意識の原形 (*Urform*) に外ならなす。意識の原形を *Korrespondenz* は「感」 (*Das Fühlen*) と名けた。内容に對する傾向 (*Disposition*) とは即ち之である。意識の原形は普通に考へられる如く感覺を以て始まるのではなす、「感」としての運動が意識の原形である。「感」と運動とは別物ではなす、「感」は運動の附帶 (*Annex*) である「感」は運動として意識を生産し又意識として運動を生産する。前者が即ち論理の基礎となり後者が美學の基礎となるのである。純粹感情とは此の如き意識の原形を言ふに外ならない。意識の原形としての「感」は同時に内容の原形である。ウルフホルムの意識として運動を生産するが「感」は又意識とし

て運動の附帶である。運動の附帶としての「感」は純粹感情に於ける「愛」(Eros)でなければならぬ。愛は美的感情の最も純粹なる内容である。藝術は愛の表現である。希臘文明の精華は愛の藝術であつた。プラキシテレスの藝術は愛り象徴に生れプラトンの哲學はエロスの憧憬に育つた。エロスは單なる性愛を意味するのではない。プラトンが「フェドルス」の中に説いたやうに靈の指揮者を云ふのである、靈の根本的動力を云ふのである。眞理に對する憧憬を云ふのである。人類に對する道義的精神を云ふのである。而して最後にそれは神に對する愛を意味するものであつた。神は我々の感覺には現れない、神の認識は神の愛である。神の愛は人類の愛である。ユダヤの宗教は第一に神の唯一存在であり第二に靈の淨潔であり第三に神の愛であつた。コーエンは彼の人格の根柢にひそむユダヤの神に支配せられつゝカントの哲

學を學んださうしてカントの三批判を解釋するにプラトンに依つた。かくして彼の三大著書が出来上つたのであるが彼の哲學體系を統一するものは實に純粹感情に於ける愛の思想であつたのである。愛はたゞに藝術の根源 (Ursquelle der Kunst) であるのみならず又凡ての意識の原形である。眞理の追求も愛の發現であり義務の服従も愛の實現である。プラトンの哲學は實にエロスの哲學であつた。コーエンは無論カントの忠實なる學徒としてどこまでもカントの立場に止まらうとしたのであらう。新カント學派をもつて自ら任じたコーエンはさすがに彼の最深の要求たるユダヤの思想に歸ることができなかつた。併しコーエンの哲學は第一に徹底せる統一を求むること、第二に思索の純粹を尊ぶこと、第三に人類に對する熱愛に燃えてゐたことに於て彼はあくまでもユダヤの神に支配せられてゐた。彼をカントに結びつけたものは

實にプラトンの哲學であつたと思ふ。ユダヤは人民があつて國家なき種族である。獨逸は國家のみ強くして人民の無視せられた國である。苦々しき獨逸のミリタリズムが遂に目下の戰亂を惹起せるを見てコトエンは遙にプラトンの理想國を夢みながら淋しく死んだのではなからうか。

寄贈書籍雜誌

- 佛典の解説 常盤大 著 丙午出版社
- 朝鮮佛教通史 李能和 著 新文館
- 哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、六合雜誌、東洋哲學、無盡登、東亞之光、早稻田文學、學校教育、教育、内外教育評論、普通教育、教育學術界、教育界、教育時論、兵庫教育、靜岡縣教育、滋賀縣教育會雜誌、岐阜縣教育、三重教育、愛知教育雜誌、都市教育、佐賀縣教育、藝備教育、宮城教育、愛媛教育、山形縣教育、秋田縣教育雜誌、第三帝國、理科教育、密宗學報、神學之研究、

前 號 日 次

高次の對家……………	文學士 中川 得立
呪術に於ける合理性の意識……………	文學士 宇野 圓空
シニタムラーの社會哲學……………	文學博士 藤井健治郎
心理學と客觀的方法(承前)……………	文學士 檜崎淺太郎
ヅェルケムの計及其社會學的研究……………	文學士 銅 直 勇